



日本の悠久の歴史をひもとけば、そこにはわが国を支えてきた「なでしこ」たちの存在があります。福岡の人気歴史家・白駒妃登美さんに、そんななでしこたちの知られざる歴史物語を紹介していただきます。

しらこまひとみ
博多の歴史家 白駒妃登美



異国の父に憧れて

——日本初の女医・楠本イネ

＊差別と偏見の嵐のなかで

ハーフトレントが人気のご時世ですが、それはグローバルな時代性があればこそ。江戸時代は、外国人自体が珍しく、ましてや日本人とのハーフなんて、存在そのものが驚きだったことでしょう。そんな江戸という時代のただ中を逞しく生き抜いた元祖ハーフ女子・楠本イネが今回の主人公です。鎖国政策をとった徳川幕府が、西洋諸国の中で唯一、交易を認めた国がオランダです。文政六（一八二三年）、長崎・出島のオランダ商館に、一人の医師が着任しました。幕末史に欠かせない、この人物の名はシーボルト。イネは彼の娘として生まれました。イネの母は日本人で、名を瀧といえます。植物学者でもあったシーボルトは、可憐な紫陽花の花に「HYDRANGEA OTAKUSA（ハイドランゲア・オタクサ）」という学術名を

つけるほど、瀧を深く愛しました。「お瀧さん」が「オタクサ」に。紫陽花には、こんなロマンスが秘められていたのですね。ところが親子三人の幸せな暮しは、あつげなく終わりを告げます。シーボルトが禁制品の日本地図を海外に持ち出そうとして罪に問われ、国外追放となってしまうからです。世に言う「シーボルト事件」です。この時、イネはわずか二歳。外国船打払令が出て数年後という時期でもあり、そのハーフの顔立ち故に、イネは差別と偏見に晒されました。頼りの父と生き別れ、母娘はさぞ肩身の狭い思いをしたことでしょう。

＊待ち焦がれて三十年

そんなイネの希望の光、それは父・シーボルトへの「憧れ」でした。いつの日か父に会いたい、そして話がしたい——。その

楠本イネ 明治初期、日本で初めて産科女医として西洋医学を学ぶ。医師・シーボルトの娘。(1827-1903) 後に上京し、宮中の産科医となった。

【イメージイラスト】
アオジマイコ